

---

# マレピト来たりて 前編

安積

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マレビト来たりて 前編

### 【Nコード】

N0495BA

### 【作者名】

安積

### 【あらすじ】

典型的異世界トリップ……なんだろうけど、何でこの人たちがそんなに異世界人慣れしてるわけ？

数ヶ月という短周期で異世界から人やら何やらがやってくる世界に、何の因果かやってきてしまった日本人が、何とか順応しようと頑張っ  
って生きていく話。

同名投稿小説の、改行修正、分割話統合版です。第6章分までをこ

こちらにまとめていきます。内容は全く同じです。

## 序章

勢い込んで家を出た、初出勤のその日。

慣れないスーツに着られてる感は否めなくても、それでもやる気だけは一杯で。

意気揚々と家を出た。

ほんの少しの不安と緊張とそれに勝る多大な好奇心を胸に。

それなのに。

どうして私は異世界イニにいるんだろう？

意外に落ち着いてるもんだよね。

ただの娯楽でしかなかったファンタジー小説もこんな風に役立つことがある訳か。

予備知識も何にもなしにいきなり異世界に来ていたらきつとパニックを起こしてただろう。

もしかして、昔から神隠しの話があったのってこういう現象に巻き込まれる人が実際にいたからなんじゃないだろうか？

となると、あくまで楽観的な予想に過ぎないけれど、場合によっては帰れることもあるわけで。

でも、逆に言えば万が一どころでなく低い確率だけど、ここから更に別の世界に行ってしまう様な可能性もある訳か。

二度あることは…とも言出し、とりあえずは帰れるかもしれないけどこの世界での生活の目的をつけることが重要かな？

となれば、まずは職探しか。

……結局、辛い就活から逃れられてもまた職探しな訳ね。  
この世界にハローワークみたいなものはあるのかな？

異世界初日。

訳の分からぬままに保護された神殿で、空に浮かぶ7つの月に眩暈を覚えながらも、微妙に現実逃避をした脳は眠りという精神安定剤の補給に異議を唱えはしなかった。

序章（後書き）

2012/01/06 ルビ訂正

何の因果か異世界に来て、早1週間が経過した。因みにこの世界での1週間とは6日のことで1月は24日である。

まあ、それはどうでも良いが、何とか現状を把握し慣れてきたかな、といったところだ。異世界トリップものでは時たまあるバージヨンだが、この世界は「渡り人」に慣れているようだ。「渡り人」って言うのは私のような異世界からやってきた人々の事らしい。

別名「マレビト」。

これはこの国、アウトラーシェン周辺でだけ通用する言い方らしく、あまり一般的ではないのだそうだ。

話が逸れたが、何でも、毎年或いは数年に一度何処かしらには「渡り人」が現れるのだとか。しかもこの国だけじゃなく、他の国でもそうらしい。恐らく、この世界全体で見れば数ヶ月周期で渡ってくる人がいるのではないかと、私を保護してくれた神官が教えてくれた。しかも、やってくるのは一つの世界に限らないらしい。私と同じように地球から来る人もいれば、別な世界から渡ってくる人もいるとのこと。人に近い種もいれば、所謂獣人やら竜のような生き物である事も。人種の坩堝やサラダボールなんて比ではない。

ある人はまるでゴミの集積場だ、と自嘲気味に言ったらしいが。どうしてこんな事になっているのかは大分前に判明している。嘘か本当か定かではないが、かつて神託が下ったのだという。

曰く、この世界に必要でありそうな人材を見繕って集めているのだ、と。

世界で生まれた人たちも元を辿ればそうやって集められた人たちの子孫なんだとか。この神託を受けたのは特に信仰心が篤いというわけでもない、どこにでもいそうなおっさんで、神託を受けてからの開口一番の言葉が「余計なお世話だクソっ垂れ」だったと伝わっている。なんでも、神託が下る前年に新たにこの世界に落とされた

竜によって最愛の息子を殺されたばかりだったとか。

神と人間の価値観は違う。人にとってはふざけたことでも、神にとってはこの世界が完成するのに必要な処置だったという事だろう。今でこそもつと積極的にこの世界に関わりを持っていく神だけれど、このときはまだ意外と放置気味だったらしい。それにも拘らずこの話が信じられたのは、そのおっさんのように神なるものももし実在するならば確実に恨んでいるだろう人々を中心にその神託が下ったからだ。一人が言っただけならただの戯言でも、証人が複数いれば信用される。多くの証言者がいながら、何故かその中には一人も聖職者がいなかった。それ故、なぜ自分に託宣を下さらなかったのかと嘆いた聖職者も多くいたとか。

私が思うに、信心の篤い聖職者に神託を下したところで信憑性が薄かったり、変に歪められてしまうと心配したんじゃないだろうか。どことなく、この世界の神様は人間臭い気がした。とにかく、それらの証言の数々は神殿に集められ、一冊の本としてまとめられた。今では世界中の誰もが知っている内容だが、世界は変われども噂とは人の口に膾炙されやすいものらしく、実は公にされてない神託があるのだ、世界の終末の預言があるのだの様々な都市伝説も合わせて広まっているらしい。

この手の噂を最初に広めたのはアメリカ人の「渡り人」ではないかな、と思ったりするが、それは私の勝手な想像だ。でも、アメリカ人ってそういう政府陰謀系の都市伝説好きだよな。

まあ、伝聞が多くなったがそんな訳で「渡り人」たちはこの世界では当たり前前の存在なのだ。だから「渡り人」を迫害したり逆に優遇したりするような事はないが、普通に生活していこうと思えばそれほど困りはしないだけの制度作りはされていた。

「渡り人」が世界に必要な存在であると神から言われていることもあり、まずは何が出来るか、どのような知識や技術、能力を持つ



ているかという事が調べられる。そこで特別なものを見出されれば、研究機関やら何やらで仕事につく事も出来るが、そういう人物はあまり多くはない。大抵はギルドにて自分のできる仕事を斡旋してもらつ事となる。

そう、ギルドだ。

異世界トリップおよびファンタジー世界のファンが垂涎のギルドである。もしかしたらこの仕組みはゲームやラノベ好きな地球人が考えたんじゃないのか、と思うほどその手のギルドに良く似ている。間違つても、中世以後のヨーロッパでの商工会としてのギルドのあり方ではない。

何と言つるか、分かりやすく現代の言葉に直すなら職業斡旋所…といてもハローワークではなく、人材派遣会社とでもいった感じだろうか。そうあれだ、携帯ですぐ登録、週末には日雇いのバイトというグツ　ウイ　やらモ　イトやらそんなのとよく似ている。

ギルドに登録したら、自分が請けることの出来る仕事の候補の中からやりたいものを選んで仕事に行き、仕事が終了したらまたギルドに戻って報酬を得る。安定した生涯雇用（バブル崩壊以後有名無実となつてはいるが）が当たり前だった現代日本人からすれば、職業に貴賤はないというものの、日雇い労働者というのはかなり心理的抵抗のある職業である。というか、そうならないために大学まで苦勞して通つて、就職難が叫ばれる中、それでも頑張つて内定を得て、何とか無事に卒業して、今日から初出勤！という日に異世界なんぞに落とされて、拳句に別段特出した能力もないようだから日雇い労働に甘んじろ、というのはハツキリ言つて、神がいるものなら極刑ものだと少なくとも私は思う。

それでも、生きてく為にはそれしか出来ない。この中世的世界、安定した雇用を得るにはコネと伝手が何よりの頼りなのだ。異世界からやってきたばかりの根無し草にそんなものはない。ギルドでコツコツと信用を溜め、誰か自分の能力を買ってくれる人を見つける

か、売り込んでいくしかない。

と、まあ。

異世界に落ちてきてから保護された神殿で、1週間くらい掛けて色々教えてもらったり調べられたりして現状を把握する事は出来た。短い時間ではあったが保護される期間は今日で終わり、明日からは私の身は神殿ではなくこの区域担当のギルド預かりになるらしい。結構無茶な話だと思うだろうが、これらは良くも悪くも私たちのためのことなのだそう。何も知らないまま放り出すわけには行かず、かといって長い時間保護してしまえば自立しこの世界に馴染む力をなくしてしまう。ある程度落ち着いて自分の状況を把握して、且つ自分で世界に踏み込んでいく力も持っている。その微妙なラインが凡そ1週間だったのだという。これは神々がある程度、順応性やある意味での凶太さをもった人間を選別しているからこそできることらしい。つまり、この世界に来てしまった私にとってはも凶太い神経の持ち主だという事を証明されたようなものである。これを言われたときは流石に少なからずショックを受けた。もしかしたら、この世界に来てしまったということ以上のショックかもしれない。

……恐らく、こういうところこそが私が選ばれてしまった所以の一つなのだろう。

明日、朝になれば私は神殿の庇護下を離れ、異界の地で自ら歩く術を身に付けていかなければならなくなる。当分、心休まる日はないだろう。こういうときは体力温存に限る、とばかりに異界の夜に浸るまもなくさっさとベッドに潜り込む。新生活への多大なる不安と若干の好奇心と興奮を闇は飲み込み、夜は静かに更けていった。

異世界生活7日目。

庇護下を離れ、自立生活を目指して活動するという意味では実質1日目とも言えるだろう。まあ、1週間というのはあくまで目安であって体調やら精神状態やら多くの理由で保護期間が長くなる人はそれなりにいるらしい。私ももう暫くいても良いのだと言われたけれど、一度甘えればきつと離れられなくなる、そんな自覚がしつかりあった。それに、本来であれば1週間前には新入社員として自立生活をスタートさせていた筈なのだ。例え異世界だとしても、私がすぐに働く道を選んだのはある意味当然の選択と言えただろう。

でも、本当の理由は……。

「本当に登録してしまっているのですか？」

ギルドへ向かう道すがら、この1週間私の保護官であった神官がしつこく尋ねてきた。そう聞かれてしまう理由は分からなくもなかったが、一度決めた事をグジグジといつまでも言われ続けるのは不快だった。

「もう、決めました。」

自然、言葉はそっけなくなる。

それでも、否<sup>いや</sup>それだからこそか、強がっているように見えたのかもしれない。結局、ギルドへの長くはない道案内の間に15回も同じ質問が繰り返された。曰く、その年では仕事はまだ無理ではない

か、体力的に持たないのではないか、無理をしているのではないか、たった一人で食べていくのは難しい、もっと我々を頼れ、組織が嫌なら自分が個人的に面倒を見よう、否寧ろそれが良い、だのと。まあ、どれも丁重にお断りしたが。こんな暑苦しく押し付けがましい保護者は不要である。

暑苦しいとは言うものの、顔だけ見れば……ゆるく一つにまとめられた柔らかに波打つ稲穂色の長髪、瞳に映すは冬空の青、コーカソイドに近い色白の肌はムカつくくらいにつるつる、顔のパーツの形も配置も抜群、とくれば……まあ、間違まちうことなき美形であるう。もし私が男だったなら、確実に「イケメン死ね」とか思ったことだろう。「リア充爆発しろ」と、思うことはなかっただろうが。何せ性格が……これこそが所謂残念な美形と呼ばれるそれなのだと思う。

そんな美形に、たとえ多少しつこいとは言え見知らぬ世界でそんなに親切にされたらころつとオチてしまってもおかしくは無いとも思うのだが、彼に限ってそれだけは在り得ない。私を神の遣いとしてしか見ない相手に、どうして恋情など抱けるだろう？彼が私に優しくするのは、偏に私が神が遣わした「渡り人」だからである。それが分らないほど、私も愚かではないし、それを分つて尚甘える事ができるほど厚かましくも無ければ、この世界を受け入れていたわけでもなかった。

やがて静かになった神官を先導にギルドらしき建物へと到着する。見るからに過ぎた年月を感じさせる石造りの重々しい雰囲気建物だ。

「ここですか？」

すべての提案をすげなく断られたせいか幾分意気消沈して見える神官を見上げ、尋ねる。神官はまだ未練がましい瞳を向けてきたが、事ここに至ってはもう反対する気はないようだった。

「そうです、ここがエグザルダーナ地区のギルド本部です。」

そう言うのと重厚な重い木製のドアを開き、私が入るのに続いて中へ入ってきた。どうやら私の登録が終わり、完全に神殿の庇護下を離れるまではついてくると決めているようだ。なんて過保護なのだろう。普通は道案内されたらそこで終わり、或いは場合によっては地図だけ渡されてそれで終わりという事もあるらしいというのに。それはそれで困るのだが、逆の意味でとんでもないのが保護官だったなと、後僅かで彼との縁が切れることを神ではない別の何かに感謝しつつ、気づかれないようにそつとため息をついた。

早朝と呼ぶほどではなくとも早い時間だからか、ギルドの中は閑散としていた。日本の日雇い労働のイメージだと、朝早くに仕事を貰って夕方帰ってくる、という生活パターンかと思ったのだが、どうやらギルド員たちの朝はそう早くないようである。それでも、少ないとはいえ奇異なものを見る複数の視線を寄せられている事は分かった。それらの視線の持ち主をやり過ごし、幹旋内容を記した掲示板やら、おそらく受付か換金用であろう窓口を通り過ぎ、階段を上り2階へ向かう。本当に、想像していた通りゲームや小説の中のそれにそっくりだ。「渡り人」は元の世界の時代を問わずやって来るらしいから、あながち私の予想は外れていないのだと思う。特に、この国は地球からの「渡り人」が多い事で知られているということだから。

通常、ギルドの登録は1回の窓口で行われるのだという。しかも地区内にあるギルドの各支部でも登録は可能だそうだ。本部よりも

窓口が込む事も少ないので、この近辺に居住しているものでもなければ、そちらで登録する者の方が多いようだ。

だが、唯一例外がある。

異世界からの「渡り人」だけは、その地区のギルド本部の上層部でなければ登録できないのだそうだ。それは時折、後になって能力を開花させる「渡り人」も少なくないため、その管理を行いやすくするようにという理由によるのだとか。更にはまだ世界に慣れない「渡り人」の援助をしやすくするための決まりでもあるそうだ。確かに、お互い顔見知りであった方が何かと便利だろう。

階上上がり、薄暗い廊下を進む。神殿や離宮もそうだったが、ガラス窓の少ない石造りの建物は総じて日中でも暗い。神殿はそれでも白い反射率の高い石を磨き上げて使っていたのでまだ少しは明るかったが、ギルドでは削り出しそのままの石を使っているのではおさらに暗く感じた。無骨な作りは威圧感も感じさせるが、恐らくはそういった効果をもたらすためではなく、経費面での理由故なのであろう。

まあ、それはさておき。

暗い廊下のその先には細かい装飾の施された大きな扉があった。そこがこのエグザードナ地区担当ギルドの中枢だった。

ノックの後、保護官が先入室する。

「神殿の者だ。先だって連絡した」渡り人」の登録に来た。」

入りなさい、と姿は見えないが、それなりに年の行った落ち着いた感じの女性の声が聞こえた。

「…………え？子供？」

入室を促す声に従って入った私の耳に一番に飛び込んできたのは、挨拶でもなんでもなく、気の抜けたようなそんな言葉だった。どつしりと重そうな執務機の向こうにいる女性も若干ビックリしている。だが、どうやら先の発言はその隣にいる秘書らしき若手の女性のものようだ。既に連絡は言っていたはずなのだから、そこまで驚かなくてもいいと思うのだが。

「部下が失礼を。けれど、言い訳になってしまいますが、話には聞いていたものの、これは驚くな、という方が酷というものでしょう。」

奥の執務机から初老の女性が立ち上がって声を掛けてきた。彼女がギルド長なのであるう、落ち着いた雰囲気、しかしそれだけではないだろうことを伺わせる独特の雰囲気的女性だ。

「御挨拶が遅くなり申し訳ありません。エグザードナ地区ギルド支部長のハーナン・エルドです。はじめまして、異界から参られし方。」

「はじめまして、”渡り人”アトルディアです。」

ギルド長からの挨拶に対し、未だ言い慣れぬ名を返す。当然、偽名である。というか、正確に言うならば字、名乗りの為の仮名というべきか。この世界、否、この国はかつて言霊信仰が盛んであっために今尚その名残として真名信仰が強く残っている。そんな土地柄ゆえに、この国の出身者は本名を初対面の相手に教える事はまずな

いのだそうだ。

だが、どうやらこの支部長は異国の出身であるのだろう、恐らく先程の名乗りは字ではない。何故なら、通常字に姓がつくことはないからであり、また非常にシンプルな名であったからである。真名信仰の盛んなこの地の人々の名前は、字に限らず本名もまた自らを守護する神々や精霊の名を組み込むために非常に派手派でいい名前なのだ。私が名乗ったアトルディアもまた、そういった意味も込めて神殿から与えられた「渡り人」としての公の名である。純日本人が名乗るには似つかわしくない名だが、致し方ない。通り名は好きないように付けて良いと言われており、普段からそう呼ばれるわけではない事だけが救いである。

「アトルディア……ああ、町の北西にある滝の名ですね。元はそこに住む精霊の名だとも伝えられています。貴方はあの場に」渡られたのですね。」

「はい。」

渡り人の名の多くは落ちた場所に由来するらしい。その土地土地の神々や精霊が私たちに加護を与えるからだとされている。私も例に漏れず、落とされてプカプカ浮いていたその滝の名を与えられたのだ。元がその滝の精霊の名が由来であるから丁度良いだろう、とのことだ。そんな適当で良いのか、と思わなくもないが、神殿の偉いさんがそう言ったのだからきつと良いのだろう。

それにしても、と彼女は続ける。

「先程部下の非礼を詫びたばかりではありませんが……実年齢は二十二だと言われましたか。」



「はい、今はこんな形なりなので信じ難いでしょうが。」

「そうですね、”渡り人”が非成人である事はないと知っていなければ納得できなかったでしょう。それを分かっていても、失礼を承知で申し上げれば十を越えているようには到底見受けられません。」

まるで幼子を見るかのような　　実際彼女としては似たようなものだったのだろう　　柔らかい微笑を浮かべられてはなんとも言いようがなかった。

「……十歳以下、ですか。体感的には十三歳の頃の頃とそう変わらないように感じているのですが。」

純粋な子供にしては早熟に見られるであろう苦笑を浮かべつつ、そこだけはしっかりと主張した。もはや異世界トリップのテンプレではあるが、この国の人たちの多くが地球でのコーカソイドに近い事からも、より幼く見られるだろう事は十二分に有り得ると予想してはいたが、人からはつきりそう言われると地味に堪えた……。

私だって、好きで子供になったわけじゃないんだい……。望まぬ異世界トリップの上にガキ扱い……。本気でイジケても良いだろうか？

私はこの世界に来たときに子供の姿になっていた。恐らくは十二、三歳くらい頃とほぼ同等の身長なのではないかと思う。中一の時には身長伸びは緩やかになっていたし、以前よりは微妙に低く感じる視点からして然程ズレはないだろう。どういう原理かは分からないが、この世界にくるにあたって体はこの世界に最適化されるのだという。言語なども通じるのもその最適化された結果によるものなのだとか。通常は容姿がそう変わる事もないらしいが、極稀に容姿が変化する人や色彩が変化する人、中には種族すら変わってしまう人もいるらしい。そういう意味では、ただ単に若返った私はまだまだ仕方である。

ギルドに登録するのに外見年齢では年齢制限に微妙に引っかかるが、実年齢は二十二だと伝えてあるので書類上は一応問題ない。その事はちゃんとギルド側にも伝えてあったはずなのだが、聞いてはいてもやはり実際に目にするのでは違うようだ。何より、私のように若返った”渡り人”も前例がなかったわけではないようだが、どちらかといえば珍しい部類であり、尚且つ成長を待たずにすぐにギルドに登録したものはほとんどいなかったと聞けば、なるほど、先程の驚きもおかしなことではないのだろう。そして、神殿の関係者が口をそろえてまだ早いのではないかと言っていたことにも頷けた。尤も、だからといってギルド登録を辞めるつもりは毛頭ないが、ギルド長もその事は分かってくれているみたいだった。

私を子供呼ばわり（外見はまさしく子供なのではあるが）してくれた若い女性　ミリアナ・ファレルというらしい　の淹れてくれたお茶を飲みながら話を進める。

とりあえず、私に関する簡単な説明、神殿で受けたさまざまな検

査や出身地、境遇に関してなどを話し終わると、早速登録のための書類を持ってきた。書類に印字されているのは日本語ではなく、それ以外の私を知る地球の言語のいずれでもなかった。だが、私はそれを読む事が出来た。この1週間のうちに神殿で教えられた事によれば、先に言った身体の最適化に付随する能力なのだそうだ。その人物が元々持っていた知識にこの世界のそれに同等する知識が関連付けされるのだと言う。

例えば元の世界で読み書き会話が出来れば、こちらの世界でも落ちた地域の国の主要言語の読み書き会話が出来るといったように。元々知っている語彙ならば理解できるが、知らない言葉を理解する事は出来ない。その点、日本人の”渡り人”は結構仕事面で優遇される事が多いのだとか。まずほぼ確実に読み書きが可能で、計算も得意、好みはどうあれ本を読む事は必要な勉強と言われれば然程苦としない。生憎、外見年齢のために当分私には縁のない話だが、日本人は各国の王族や神殿、大店に仕えることが多いのだという。これはコネも伝も何も無い”渡り人”の中では異例の待遇なのだとか。いずれ身体が成長した暁には、私もそんな職場に就職できれば良いのだけれど。何せ、王宮や神殿といえれば日本で言う政府であり、行政機関だ。この世界では王族は須らく神の子孫である。そんな彼らが国の中枢であり、政の担い手なのだから、当然、親たる神に仕える神官たちは行政機関の一員、言わば官僚、国家および地方公務員である。当たり前のことながら、給料も良い。

しかし、当然の事ながら見た目子供が就職できる先ではない。体が成長するまで数年待つ？私に限ってはありえない選択だ。故に、私は自活を目指すならギルドに登録するほかないのだ。勿論、成長する前に地球に帰ればそれに越した事はないのだが。

私が契約に関する条項を読み終えたのを見計らったのか、ギルド

長が口を開いた。

「さて、そちらの契約書に著名してもらえば貴方はギルドの一員となります。既に知っているとは思いますが、そうなれば、正式に貴方の身は神殿の庇護下から離れ、我々の預かりとなります。とは言つても、先程も説明した通り暫くの間は僅かではありますが最低限の生活を保障するだけの金銭、或いは物資が神殿から支給されますが。それでも、今までのように神殿が何から何まで全て面倒を見してくれるという生活は出来なくなりますよ？ 本当に、構わないのですね？」

「どちらにしても、いつまでも庇護下にいるわけには行かないのでしょう？ それならば、私は早めに今後の生活になれておきたいんです。」

「わかりました。では、登録前に確認ですが、今の貴方には後見人はいないのですね？」

「はい。」

「この世界では、貴方の生まれた世界と違って血縁や地縁、コネや伝手と呼ばれる繋がりが非常に重視されます。後見のない身では何事もなせないその事をよく知っておいてください。では、”渡り人の通例どおり、ギルドが貴方の後見を務めるといふ事で構いませんか？”

「は

「後見は神殿で務める。」

あ？」

はい、と言い切る前に後ろから邪魔が入った。言わずもがな、あの男である。思わず引きつった顔を取り繕う余裕もなく振り返る。顔だけしか取得がないんじゃないかなるかと思いつくと常々疑っていた男は、至極真面目くさった顔でのたまった。

「後見には私になる。」

「ちょっと待ってください！私はギルドに頼むつもりで……」

「これは君を神殿から出す上での条件の一つだ。」

「聞いていません！そんなの。」

食って掛かろうとする私を制し、ギルド長が口を出す。

「それは、神殿の総意と見てよいのかしら？それとも、貴方一人の考え？」

「どちらとでも。」

明確に答えはしないが自信を持って言う。だが、勘でしかないがこれはこいつの独断だ。これを言うためにここまで来たのかと、ようやく私は理解した。

「神殿が条件だというならば、こちらとしてはそれを覆す手はあまりないわ。確かに後見役としては申し分ない相手ではあるけれど……」

「…」

「……変更は、難しいんでしょうか？」

「神殿側が納得するだけの後見人を見つけるには時間がかかるでしょうね。そうなれば、ギルドの登録自体も遠のくわ。」

「……分かりました。それでお願いします。」

ギルドが単純に後見するよりもはるかに多くの優遇措置が受けられるのだから、儲けものとも思っておきなさい、他の「渡り人」がどんなに望んでも手に入らないものよ、と微笑まれては何も言い返せない。私としては苦渋の決断だ。それでも、どうしても私には早急に仕事が必要だった。頑張りなさい、とエールを送ってくれたギルド長に挨拶をし、満足げな顔の神官と共にその部屋を後にした。

帰り際、1階で早速明日からの仕事を探すため掲示板を見上げた。先程通り過ぎたときよりも好奇の目は増えていたけれど、神官がすぐそばにいる事から見る以上のことはしてこなかった。からかわれたらそれも利用してやろうかと思っていたんだけど……本当に、過保護な人だ。

恐らく、今日中には子供姿の”渡り人”がギルドに登録した事は町中に広まるだろう。多少その情報を増やしてやる事は吝かではない。とりあえず、目当ての依頼の紙を神官にとって貰う。先に窓口へと進み始めた神官の眼を盗み、窓口へ行く前に、くるつと振り返りにっこり笑って一礼をした。案の定、好奇の視線を寄せていたギルド員たちの視線はしっかりと私に集中している。神官が、私が何かをしようとしていることに気付いて止めるためか近づいてくるのが目の端に映ったが、もう遅い。声が掠れないように、就職活動で鍛えたよく通る声を意識する。

「はじめまして、ギルド員の皆様方。本日、ギルドに登録しました、

異界、地球の日本から来ました”渡り人”アトルディアです。」

地球、日本という言葉に反応した人が何人か見えた。若干、好奇の視線に好意的な色が混じり始める。これは先人たちに感謝すべきなのだろう。極力、明るい声と表情を心がけながら後を続ける。

「読み書き計算は得意ですが、今のところ特殊能力は発現しておりませんので悪しからず。こんな形なりではありますが、一応れつきとした成人ですのでどうぞ宜しくお願い致します。」

よし、ちゃんと言えた！ 内心ガッツポーズをしながら笑みを浮かべる。内容としては短めだが、気分的には就活の面接での自己アピールを無事終えたときに近い。呆気にとられている面々を尻目に再び一礼すると窓口にとつてかえした。何故だか後ろから笑い声が響いてきたが気にしない。無然とした顔をしている神官だって気にしない。

爪先立ちで背伸びをしながら 再び後方から爆笑が響いたけれど、以下略 窓口に依頼の紙と、先ほどギルド長に貰ったギルド員としての契約書の控えを出す。この契約書の控えが、ギルド証が発行されるまでの私の身分証明書となる。神殿から発行されている身分証もあるけれど、それではギルドの仕事は請けられない。故にこの一枚の紙切れは私にとっては大事な命綱だ。確認され返された契約書を丁寧にバッグにしまった。

そして説明されるのは契約の履行内容についての説明、これはもうテンプレ的な内容だから以下略。一つだけ違つとすれば、明確なレベル設定は存在しないという事。個人の力量を正確に測るのが難しい、というのは確かに理由の一つなのだが、ただ単純に必要ながない、というのが一番の理由だそうだ。

無茶だと思われる仕事なら一応ギルド側から注意が促されるけれ

ど、最終的には受ける受けないは個人の自由であり、出来なければ違約金を払うというたつたそれだけだ。それ故に失敗を繰り返す場合、信用の失墜は免れず、その影響は大きい。仕事を請ける受けないは個人の裁量に任せられると言え、評判が落ちれば依頼側からこの人だけはやめてくれ、と言われる可能性が出てくるわけだ。因みに、この評判は街の噂と言う形で人々の口に乗る。仕事上の信用問題だけでなく、人格の問題として扱われてしまう事もままあるため、当然無茶な仕事をする人と言うのは少なくなるので、レベル設定なんて必要ないのだそうだ。他の情報ソースがほとんどないとは言え、街の噂恐るべし、である。日本では人の噂も75日と言ったが、実際75日も仕事が出来なければ基本的に日雇いであるギルド員は日干しになってしまふ。そりゃ、自ずと気をつけるようになるってものだろう。

そんなこんなで、私も確実に出来るだろう仕事を選んだ。請ける仕事は単純に草むしり。期間は明日から1週間、場所もギルド本部近くの民家である。当然、賃金は低いが今の私ではこれがせいぜい。それでも、これが私のこの世界での第一歩だ。

神殿の保護下は安全で安心で、何もしなくても良い所だった。この世界に慣れるまで私を守ってくれた。

でも、何もせずただただ受動的に過ごす日々は、ふとした瞬間に地球のことを思い返させた。両親は、兄弟は、友人たちは、一体どうしているだろう。この世界に来てしまったことを認識するのに1日、理解するのに1日、地球を諦めるのに……まだ、私は諦め切れていない、とりあえず、現状を受け入れるのに1日、4日目には地球を 思い出した。

ふとした瞬間に家族を、友人を、残してきた様々なものを思った。



早過ぎるといわれた仕事の開始。でも、私は何も思い出す暇もなくいたかった。無理無茶無謀なんて、想定のうちだ。思い出してしまえば、泣かずにはいられなかったから、周りの人に当たらずにはいられなかったから、神を憎み恨み辛みを吐き罵倒し続けずに入らなかつたから、己の不幸に溺れ嘆きつづけずにはいられなかつたから、誰かを傷つけ、誰かから大切なものを奪わずには、この世界を呪わずにはいられなかつたから。何も感じずに眠りたかった。だから、私は小さくなつた体で無理を押ししても仕事を始めたかったのだ。

とりあえず、ギルド登録はなった。依頼も請けたが、仕事は明日からである。朝早くにギルドに来た為、まだ日も高い。さて次は何をするか。やりたい事は色々ある、けれど先立つものが何も無い。そもそもこの世界に来る時に持っていたものの他は、神殿で支給された2着の服以外、何も持っていないのだ。つまり、生活に必要な様々なものが一切無い。ありがたいことに、というかよくよく考えれば当然の配慮なのだが、自活出来る様になるまでは神殿から一定額の支給がある。だが、これはいずれ成すであろう何かへの期待が担保である。未だ何のためにこの世界に来たのかすら分からず、常々平凡・平均・どこにでもある存在であることを自負し、特別な何かを成す事が出来るとは到底思えない私としては、出来ることならあまり手を付けたくはない。でも背に腹は変えられないので、最低限生活をなんとか出来るだけのお金はありがたく使わせてもらうことにする。

何も気にせず支給金を使う人もいると聞いたが、人は人、である。私がこんな考えをもつのも「他人に借りを作るな」という我が家の家訓故だろう。異世界に来たからとはいえ、いやだからこそ、20年近く刷り込まれたそれはそう易々と消せるものではない。それは私と、遠く離れた家族とを繋ぐものだから。まあ、それは今は考えまい。

今、考えるべきは…。

「まずは住居か…」

ギルドと提携している安い宿屋もあるようだが、果たして子供の姿で借りられるのか。

「まさか、引越すつもりですか？」

一人考えに耽っていたら頭上から声がした。駄目ですよ、許しません、とか何とか言ってる。ああ、まだこいついたのか。

「でも、私は既にギルド預かりの身になりましたし、ただでさえ当面の生活費は援助していただくのですから、これ以上厄介になるわけには…。」

っていつか、勝手に私をこの世界に連れてきた神に係のある場所に長居したくはないのだ。そこにいるだけで、この理不尽に神経がささくれ立つのが分かるから。

「先程も言いましたが、我々としてはまだあなたを神殿から出すのは反対なんです。例え預かりはギルドに移ったとしても私が後見人である以上、神殿から出ることは許しません。」

私の意思を無視して勝手にあなたが後見人になったんでしょ。私はギルドに頼むつもりでいたのに。

「正直、神殿は気疲れするのです。ただの穀潰でしかないのにあのような生活を送るのは息が詰まります。」

「それは、お役目が知れぬからですか？」

「……はい」

神が遣わしたって言われても何の能力もない私には、貴殿方の親切の陰に見え隠れするその期待が負担なんです。きっと言っても分からないだろうけど。

一週間、共に過ごしてよく分かった。彼等にとって、「渡り人」は最も身近な神の力の体現、言わば神への信仰の対象の一片なのだ。しかも、あまりに身近すぎるために彼等自身にその自覚はない。無意識の期待、それは意識しないほどに深く染み付いているともいえる。

だからこそ厄介だと思っし、だからこそ私はそれが恐ろしい。もしも、彼等の期待に応えられなかった時、彼等がどう変わるのか。期待に応えられなかったならばまだ良い、ただの役立たずと呼ばれるだけだろう、或いは”まだお役目を知らぬだけ”と。

だが、もし、私にも役目と言うものがあり、それがかつて”災厄”と呼ばれたものと同様のものだとしたら……神と人の考えは異なる。私をもたらずものが災厄であれば、彼等は私を即座に排除しようとするのではないだろうか。まあ、これはうがち過ぎた考えなのかもしれないが。

どちらにせよ、未来を担保に借りを増やしたくはない。

「王宮と神殿を見ただけでは分かりにくかったことですが、こうして街を歩いてみればよく分かります。今の私は貴族並の扱いを受けているのでしょうか？」

恐らく国一番の豪華な場所と世俗と切り放された場所を見ただけでは、ただ良い生活をさせて貰っている、くらいにしか分からなかった。けれど、こうして市井に降りてみればそれが一般民と比べてどの程度のものであるかは容易に想像できる。二着しか支給されていない衣服にしたところで、デザインこそシンプルだが市井に暮らす人々のそれと比べればその質の差は歴然だ。神殿はそもそも神に仕える人々の施設であって、彼等は基本的に自分の物という物を持たない。その前提で考えるならば、高位神官や貴族が着ても見劣りしないだろう服を二着というのは既に破格の扱いだ。

「私は貴族でも郷土でもなく、普通の一般的な中流家庭の出です。社会構造、基盤そのものが違いますから、こちらの世界の町民やら商人と呼ばれる方々と同じとは言えませんが、少なくとも貴族階級の子と同一扱いは私には分不相応です。」

「確かに貴方の生まれはそうかもしれませんが、けれど、今の貴方は”渡り人”であり、そして神は人を生まれの貴賤で差別することはありません。貴方はその生まれを恥じることはありません。貴方はこの世界で成すべき事があると神が認められ、今ここにいますから。」

かもしれないって、何だ。私は一億総中流とかつて呼ばれた社会の列記とした庶民だし、そしてそのことを恥じてなんかいない。望んで”渡り人”なんかになつたわけでもない。寧ろ、自分で道を選べたと言うのなら絶対に選びはしなかつただろう。

「だからなんだと言うんです？ 世話してやっているんだからおとなしく受け入れるとでも？」

「そうは言っていないません。」

「同じことでしょうか？」

その生活そのものが苦痛だと言っているのに。

「誰もが傳かれる生活を願っているわけではありません。」

どうせ、言ったところで分からない。ならば、私に出来るのは一つだけだ。今神殿を出ることが出来ないと言うならば、早々に一人

立ちをし神殿を出ることだ。それまでの余計な出費が減ったと思えば良い。日本にいた頃だって、引越越しするときは良い条件のところが見付かってからだっただけだから。

「もう良いです、分かりました。それでは一人立ち出来るまで、もう暫くお世話になります。」

何を言っても、きっとこの人は理解しようとはしないだろう。

この話はこれで終り、とばかりに何か言いたげにしていた男の言葉をつむがれる前に切り捨て封じた。異論を受け付けるつもりはない。いかに言葉をつむごとと所詮それは加害者側の都合でしかないのだから。被害者側の人間である私が聞かねばならぬ道理はない。

「さて、次は古着屋ですね。案内をお願いします。」

なにはともあれ、まずは仕事をするために必要なものを揃えなくては。ドレスは論外だが、神官服でだってギルドの仕事には向いているとは言えないのだから。

何故ここでの選択肢が古着屋なのかと言うと、この世界、まだ既製服と言うものがほとんど存在しない。新品の服を買おうとすれば、布を買って自分で仕立てるか、仕立て屋に頼むかだけである。となると、裁縫の腕がそれほどない人や、できれば早急に、或いは安く服を手に入れたい場合どうするか、そういった消費者のニーズに对应的なのが古着屋である。サイズとデザインの点で問題がないわけではないが、そもそも作業着として買うのだから今回に限っては問題ない。

こういった知識を私に与えてくれたのは、目の前の残念な美形ではなく、私の生活面での世話をしてくれていた女中さん？の一人である。生きていく上で重要な知識はほとんどその人から教えてもらった。エメラ：姉さん、本当にありがとう。私のほうが年上なのに、

思いつきり子ども扱いされた上、お姉ちゃんと呼ぶ事を強要されたけど、それでも貴方には感謝してます。勿論、流石にお姉ちゃんとはいえなくて、姉さんで妥協してもらったわけだけれど……。

因みに、この後の買い物で彼が全く役に立たなかったことをここに明記しておく。そもそも古着屋の場所すら分らないとか……。これだから箱入り育ちの坊っちゃん……。呆れ返った私の声を聞き届けたものはなかった。

エメラさんにお勧めの店の名前を聞いておいて本当に良かった。町の人に尋ねながら漸くたどり着いたのが子供服専門店だったのはやっぱりちよつと凹んだけれど。子供って、成長が早いからお古はこうしてよく売られるらしく、利用者も大人以上に多いんだってね。お陰で良いものが揃いました。

明日から、頑張るぞー！！

安かったし、色々おまけしてもらったのでそれなりの量の子供服と、他にも色々と必要になるだろうと思われる小物類を抱えて日没ちよつと前に神殿に帰りついた。なんか、今日はとっても精神的に疲れる一日だった気がする……。

夕飯もお風呂もそこそこに、今夜もまたさつさと寢床にもぐりこむ。木戸を閉めた窓からは外の様子は分らない。私は明日のことを思い、まぶたを閉じた。

それでは、皆さんお休みなさい。

「それでは行つて来ます。」

いつてらつしゃいやら気をつけて、頑張つて来いといった多くの言葉に見送られて神殿を出た。何で、こんな事になつたんだろう？ 早めの朝食を食べ、いざ出発と思つたら何故か大勢の神殿職員たちが玄関に集まっていたのだ。神殿の朝は早い。夜明け前の薄明に鳴らされる一の鐘の前に半数の神官は既に起床しており、日の出と共に二の鐘が鳴らされると神殿に住む全ての人が活動を開始する。三の鐘が鳴る頃には食事も終えて、皆仕事を始めているのが常である。

私は今日から初仕事言う事もあり一の鐘で起きて、二の鐘が鳴る前には食事を終えた。それから神官服から作業着に着替えるなど準備を整えて出て来たとは言つても、三の鐘は鳴っていない。まだ仕事を始める時間ではないとは言え、この時間は食事をしたり身嗜みを整えたり、それが終わっていたとしても自分のために使える数少ない貴重な時間である事は変わらない。

なのに、何でこんなに出て来るんだ。多分、神殿に住む人たちの3割以上はいる。……特に神官長、あなたは今日は三の鐘からどっかの貴族だかとの急ぎの面会があるからゆつくり食事も出来やしな何とか昨夜愚痴つてなかつたか？ こんなところに来るくらいならゆつくり食事してれば良いのに。

最初は皆で集まつて何をしているのかと思つたけれど、それがすぐに私を見送るためのものと気付いて何とも言えない気持ちになった。この世界の神は嫌いだし、出来るものなら殺してしまいたいくらいには憎んでいる。それでも、私のことを特別な目で見てくることに苦手意識は抱いていても、ここの人達のことまで嫌っているわけではないのだ。何より一宿一飯以上の恩がある。私への期待は



正直言つて逃げ出したいくらいに重すぎるけれど、彼らが私を心配してくれている気持ちもまた嘘ではないのだ。神への憎しみだけでそれらが無碍にする事もまた、私には出来ない。

そう、たとえそれが、まるで”初めてのお遣い”を見守るかのよ  
うな生暖かいモノだったとしても……。神官長なんて、ちっちゃい  
子にするみたいに私の頭撫でていきやがった……。

やっぱりこの人たち、私が成人だつてことちゃんと認識してない  
だろ……！

昨日は神官と辿つた道を一人歩く。今日は堅苦しい神官服ではな  
く昨日買った綿のようなもので出来た丈夫で動きやすい服だ。街の  
人たちと着ている物はそう変わらない筈だし、浮いて見えることな  
い筈…である。今日は昨日みたいにキラキラしい派手な目印も傍に  
いない。なのはどうしてこんなに声を掛けられるんだ!?

「マレビトさん」

「今日が初仕事なんだつて？」

「頑張れよ」

「頑張つてね、ちっちゃいマレビトさま」

市の客があらかた掃け、店仕舞いをしているおじさんやおばさん  
たち、市帰りの街の人たち。私はただ、神殿からギルドへ向かう大  
通りの隅っこを歩いただけだ。なのに皆が皆、私に声を掛けていく。  
ビックリしてたら、店仕舞いを終えた八百屋のおじさんがこれを食  
べて仕事を頑張りな、とプラムのようなネクタリンのような果物を

くれた。ありがとう、と言つと美味かつたら鼻屑にしてくれ、と去つていった。うん、商売上手なおじさんだ。その後も、次から次へと声を掛けられ昨日は15分ほどで着いた道のりを30分以上掛けて進むことになった。……早めに出て来て良かった。

ギルドに着く頃には微妙に疲労困憊気味に、少なかった筈の手荷物は倍以上になっていた。けれど、漸くギルド到着しこれで終わりかと思われた受難はまだ続くのだった。

まず、第一の難関はギルドの重厚な扉だった。

昨日は神官が開けてくれが今日は一人だ。この扉、巨大な一枚板で作られており、尚且つ鉄によつて補強されている。つまり、分厚い・デカイ・重い上に、こちらの人々の成人男性が用いる事を前提とされているために取っ手の位置が丁度私の顔の辺りと高く掴みにくいのだ。かと言って、ドアノッカーもまた高いのでこちらは背伸びをしても届きもしない。とりあえず、扉そのものを叩いてみたが……ただ手が痛いだけだった。

まさかこんな事になるなんて思いもしなかった。

ああ、情けない、意気揚々と出てきながら、職場にたどり着くとすら出来ないなんて。そうやって暫く全体重を掛けて扉を引いてみたり、痛いのを我慢して再び叩いてみたりと奮闘したものの開くわけもなく、これはもう早朝である事を省みずに大声を出すしかないのかと悄然としていたところに堪え切れなくなった様な重低音の笑い声が響いた。

流石の私もこれには思わずキレそうになる。苦労しているのに気付いたのなら、さつさと開けてくれればいいものを。というか、いつの間に人が来ていたんだ？

ギルドの入り口は大通りからちよつと奥に入った所にあり、人通

りが極端に少なくなる。特に、ギルドに登録している人たちが出てくるのはもつと遅い時間と聞いていたので人がそばにいる事にも全く気付かなかつたのだ。誰かいたなら、すぐにでも手伝ってもらったものを。開かない扉に向かって奮闘していた姿を見られていたと言ふ恥かしさもあり、ちよつと、否かなり恨みがましい目でもつて振り返つた。多分にそれは逆恨みの心持であつたが。

わお。

ふぁんたじー。

そこには爆笑する熊がいた。否、熊に似た何かがあった。多分、所謂ヒト族に属する人間ではない…と思う。

ギルドの入り口は階段になっていて、その上に私は立っているのだが、相手は道路に立っているというのに尚見上げねばならぬ身長、全体的に筋肉質な重圧的な体、毛深…ではなく動物そのものといった感じの黒々とした毛並みに覆われた熊と虎と狼を足したり掛けたり割つたりしたような頭部、手はヒトに似た五本指で、爪は鋭いかどうかやら肉球はないように見える。神殿にはいなかったけれど、この人は恐らく話に聞く獣人という種族なのだろう。彼？は一頻り笑い終えると、啞然として見上げていた私の傍にやってきた。

ホントにデカイ。3m…はないかもしれないが確実に2.5mはあるはずだ。

「お前が新たなマレビトか、笑ってしまったて悪かつた。あまりにも可愛らしく見えたのでな。まるで子供の遣いの様だ。」

子供の遣い…やはりそのように見えるのか。なんだか、もうここまで来ると一々気にするのも馬鹿馬鹿しくなってくる。そりゃ、これだけデカイ種族から見れば私なんて子供もいいところだろう。実際、今は若返っているのだから。成長が止まった後も今と5センチも身

長は違わなかった事などこの人たちは知らないのだ。それに、ここまでくると最早コンプレックスを抱くとかどうとかと言う次元じゃない気がする。

とりあえず、相手は私のことを知っているようだったからちゃんと挨拶をすることにした。ここにいると言う事はこのヒトもギルドのヒトなのだろうし。

「はじめまして、既にご存知のようですが”渡り人”のアトルディアです。タキと呼んでください。」

タキ、と言うのは予てより考えておいた通り名である。本名である滝根から取った。アトルディアも滝の意味があるし丁度良いだろうと思ったのだ。実際のところは分らないが、意外と私が滝に落とされたのもこの名前の影響もあつたんじやないかななんて思っていたりもする。

因みに、滝と言ってしまつと滝ルテと勝手に自動翻訳されてしまつのだが、日本語がもつ同音異義、同字多義の特性のお陰なのか、音だけで”たき”と発音する事も可能だったりする。まあ、どちらで呼ばれても私には特に意識していない限りは”たき”と聞こえるのだから問題はない。

「話に聞いたとおりの人間のようだな。私はエルトダム。見ての通りの獣人だ。普段よくいるのは郊外のギルド支部だがいずれ共に働く事もあるかも知れん。宜しく頼む。」

笑われたときから感じてはいたが、なかなかの良いお声の持ち主のようだ。すぐには思い当たらないが、こつこつという声の声優さんがいたらきつと売れるだろう。それは兎も角、一体どんな話を聞いたんだ？きつと、街の人も同じ話を聞いたのだろうけど。

「どんな話を聞いたのかは知りませんが……こちらこそ、宜しくお願ひします。エルトダムさん。」

「何、中に入ればすぐに分るさ。さて少し離れる。扉を開けてやる。」

「あ、ありがとうございます?。」

中に入れば分るって何さ?

「ああ、そうだ。私のことはドムで良いぞ、タキ。さん付けされるのはむず痒い。」

「…分りました。」

ん?ドム??真つ黒いでつかい熊さんの名前がドム!?しかもさつき日が射したとき気がついたけど、微妙にこの毛並み紫がかつてるよ。まさか三兄弟だったりしないよね……。もしそうだったら、今は何とか堪えてる笑いを堪えきる自信はない、と断言しよう!私がかくだらない理由で一生懸命笑いを堪えてるなんてつゆ知らず(もしかしたら気付いているのかもしれないが、そんなそぶりは見られなかった)、エルトダムさんは私が全体重を掛けても開けられなかった扉を片手どころか指2本で軽々と開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0495ba/>

---

マレビト来たりて 前編

2012年1月6日06時48分発行